



1956年6月23日朝日新聞朝刊 ©長谷川町子美術館

# サザエさんをさがして

## 「2億円抜き取り」の真相

郵政監察

手紙を渡し合う恋人同士とおぼしき男女。傍らには郵便ポスト。「どうしてポストにいれないんだろう」とは、まだ恋を知らないカツオならではの問い。だが、これに応え、友人が4コマ目で発した言葉に、驚いた。郵便物が抜き取られてはたまらないが、漫画が掲載された1956(昭和31)年に「2億円!」も抜き取りがあれば、信用できないのは無理もない。果たして、その真偽は――。

「各官庁を通じ、関係職員の不正行為による被害のもっとも甚大なのは、郵政省職員による…(中略)…類似の事犯が絶えないのは、監督並び対策になお不備があるものと認められ、当局のすみやかなる善処を望む」

前年の55年。郵便物の抜き取りや貯金の横領など、郵政業務に絡む犯罪は国会でも問題にな

っていた。衆議院決算委員会は5月、こう決議した。

●●●●●  
飢餓と焼け跡から再スタートを切った戦後の日本社会は「荒廃」や「秩序の乱れ」がいたるところにあふれていた。49年に通信省から分離した郵政省も事情は同じ。発足と同時に、身内の不始末を調べる郵政監察官に犯罪を捜査し、被疑者を検挙・送検する「司法警察権」が付与された。これを機に犯罪は漸減するが、53年度を境に増加をたどる。

「2億円」は大げさにも見える。しかし、55年度の「郵政監察年次概況」によれば、郵便の窃取など郵便関係で検挙された事件の被害額は2400万円ほどだが、横領や簡易保険、郵便年金の保険料詐欺などを合わせた検

挙事件の被害の総計は1億8623万円。85%が部内者の犯行だ。おそらく長谷川町子さんは、この数字を根拠に「2億円」と言わせたのだろう。

こう書いて、当時といまの彼我の差が、どれほどだろうと思うのは、筆者ばかりではないはずだ。

●●●●●  
「自分たちが日々やっていることは小さな一歩にすぎないが、無意味なこととは思わない。監視の目は時代を問わず、絶えず求められる。しかも情報化社会のいまの方が、よっぽど監視しやすいことも確か」

漫画に、こんな感想を寄せたのは東京都の品川区民オンブスマンの会事務局の田出浩二さん(75)だ。

現在、会員100人を数える会



手作業で区分棚に郵便物をさばく職員たち。「滞貨・遅配」も問題になった=1961年2月、東京中央郵便局で

が活動を始めたのは、オンブスマン(代理人を意味し行政監察官とも訳される)の言葉さえ、耳慣れなかった90年代。「長谷川さんが描いた『お上』不信と根っこは通じるかもしれないが、終戦直後は労使紛争も絶えず、自分も多くの時間を組合活動に割いた。ただ、定年になってみると、住まう自治体のことを何も知らず、愕然とした。それが活動の原点」。現在全国に約80ある市民オンブズ団体の中で、早くから議会の政務調査費を使った出張・視察に目を光らせ、報告書を提出させるなどの

成果を勝ち取ってきた。

10月からの郵政民営化に伴い、監察官制度は廃止され、監察官のほとんどは新会社の監査部門に移った。責める筋合いではないのかもしれないが、他の私企業同様、不祥事を逐一、公表する義務はなくなった。監視すべきは、われわれ利用者なのだ。そう考えると、掲載作の時代より、少なくとも、われわれの荷は重くなっていることだけは確かだ。(鈴木淑子)

『サザエさんをさがして』『同 その2』(朝日新聞社刊、各千円)が好評発売中です。